

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号

※ 甲 第

号

氏

名

服部 友香

論文題目

平安期における小野小町享受

論文審査担当者

主査 名古屋大学准教授 大井田 晴彦

委員 名古屋大学教授 塩村 耕

委員 名古屋大学教授 阿部 泰郎

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

平安時代の女流歌人、小野小町は、日本文学史上最も著名な作家の一人であるが、その出自や経歴については諸説あるものの、多くが不明である。その和歌も、真作と確認できるのは『古今和歌集』に採録された18首のみであり、私家集『小町集』に収められる和歌の大半は、伝承の過程で小町の作と見なされてきたものに過ぎない。本論文は、『古今集』所収の真作の小町歌を原点とし、多くの歌の増補を経て『小町集』が成立し、新たに小町像が形成されてゆく様相を明らかにするものである。

第一部「『小町集』の研究」では、『小町集』の数次にわたる増補による形成過程と、時代とともに変遷してゆく小町像を明らかにする。第一章では、『小町集』の成立とその享受について論じる。従来『小町集』の本文研究は、歌仙家集本系統および神宮文庫本系統の二系統を中心に行われてきた。本章では、さらに静嘉堂文庫本と、新出の冷泉家時雨亭文庫蔵唐草装飾本を検討に加え、諸本の生成過程と成立期を論じる。『古今集』の小町詠や伝小町歌による原『小町集』をもとに、唐草装飾本が成立、続いて原『小町集』に『後撰集』の小町詠や歌語りの過程で小町と結びつけられた歌々を取り込まれ神宮文庫本・歌仙家集本系統の第一部・第二部（『小町集』基幹部分）が成立、その後も増補と削除が行われ、現行のものとなった過程を明らかにする。第二章では、『小町集』の増補と展開の様相を、「あま（海人）」の語を用いた歌を例に論じている。『古今集』所収の2首（恋三・623、恋四・727）を原点として、『後撰集』や『小町集』では「あま」の歌の増補がなされる。『古今集』では男を拒み、揶揄する驕慢な小町像が、『小町集』では男の心変わりを嘆き、訪れを待つ孤独な姿へと、変容を見せていると指摘する。第三章では、『小町集』に3首見られる「山里」を詠んだ歌を取り上げている。「山里」の語は、『古今集』および『後撰集』の小町詠には見えず、小町像の変遷とともに、増補された歌である。その背景の一つに、海辺に「あま（海人・尼）」として閑居する小町のイメージがあった。それに加えて、多くの屏風歌の流行が、山里で男の来訪を待つ女という小町像を定着させたのだと論じる。

第二部「物語・説話の中の小野小町」では、後代の作品における小町歌の受容の問題を扱う。第一章では、『住吉物語』における小町歌の引用を論じる。『住吉』には、3例の小町歌の引用が見られ、海辺をさすらう姫君の物語に、やはり水辺を流離する小町のイメージが重ね合わされると指摘する。現行の『住吉』は鎌倉時代の改作本だが、平安時代成立の古本の段階から既に小町詠が影響を及ぼしている蓋然性が高いという。第二章では、小町髑髏説話の変遷について論じる。平安時代の『小町集』『江家次第』では恋人との再会に説話の力点が置かれるが、鎌倉時代の『無名抄』『古事談』では、小町の老残落魄を描くことに主眼があり、仏教色の濃厚な『玉造小町壮衰書』の影響が認められるという。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

小野小町は、日本文学史上屈指の著名な女流歌人であるが、その実像は、資料的な制約もあり、多くが謎に包まれている。小町の真作と見なしうる和歌も『古今和歌集』所収の18首を数えるに過ぎず、私家集『小町集』に収める和歌の大半は、後人によって増補されたものである。本論文は、小町像が実体から次第に一人歩きしていき、『小町集』の和歌が段階的に増加していく様相を明確に実証している。

小町および『小町集』の研究は、これまでも質量ともに豊かなものがあつたが、本論文によって多くの新たな知見が付け加えられた。まず特筆されるのは、近年紹介されたばかりの、冷泉家時雨亭文庫所蔵の唐草装飾本を取り上げ、この本を伝本研究に位置づけた点にある。『古今集』と伝小町「出所不明歌」を中心とする原『小町集』からごく近い時期に成立したのが唐草装飾本であり、『後撰集』に先行するという。さらに原『小町集』に『後撰集』の小町詠や歌語りの場などで小町に仮託された歌が加えられ、神宮文庫本や歌仙家集本の基幹部分が成立したという。神宮文庫本および歌仙家集本の二系統のみで行われてきた伝本研究に唐草装飾本を加えることで、諸本の成立期や増益の実態が、より詳細かつ具体的に明らかとなった。

個々の和歌の表現と発想を丁寧に分析し、成立論へと展開させているのも本論文の優れた点である。「あま」を詠んだ歌は『小町集』に少なくないが、懸想する男を挪揄する姿勢から、来ぬ男を待つ歌へと、時代とともに性格の変遷が見られるとの指摘は重要である。「山里」を題材とする歌が、やはり男の訪れを待つ女のイメージで捉えられており、屏風歌の影響がそこに認められるという指摘も説得力を持つ。

文学史的な観点から、『小町集』が他作品に及ぼした影響について広く考察している点も高く評価される。『住吉物語』との関わりにおいては、ともすれば表層的な修辭とみなされがちな引歌表現が、海浜をさすらう小町のイメージを姫君に重ね合わせる、物語の根幹にかかわる手法であるとする。首肯すべき見解といえる。『江家次第』以下、平安・鎌倉期の多くの文献に見られる小町髑髏説話についても、一つ一つの事例を丹念に検討している。時代が下るにつれて仏教的色彩が強まり、その重要な契機に『玉造小町壮衰書』があることを明快に論証している。

研究史の厚い蓄積のある小町研究において、本論文はいくつもの新たな卓見を示しているが、いくつかの瑕疵もないわけではない。『小町集』の出発点である『古今集』所収18首の検討は不十分であり、小町の実像についても再考の余地があろう。『古今集』所収の真作を起点として、次第に和歌が増補され、歌人のイメージも一人歩きしていく事情は、在原業平に類似しており、この点について論究が乏しいのは遺憾である。このように今後の課題はまだ残っているものの、本論文の価値を損ねるものではない。以上により、審査委員は全員一致して、本論文が博士（文学）の学位を与えるのにふさわしいものと判定した。